

動機づけ機能としての自伝的記憶

— 感動体験の分析から —

速水敏彦 陳恵貞¹⁾

問題

動機づけ理論の中には動機づけは基本的には認知的成分と感情的成分により構成されるという考え方がある。たとえば、Atkinson (1964) の達成動機づけの理論は P (期待) と I (誘因) を仮定しているし、Weiner (1980) の原因帰属理論でも期待の変化や感情を問題にしている。そして、両理論に共通しているのは 2 つの成分のうちどちらかといえば認知的成分が基になり、より重視されていることである。つまり、認知的成分が決定されれば感情的成分が自動的に決定されるようになっている。さらに特定の課題に限定した期待や感情を扱っていることも共通している。

本研究では日常的な動機づけの源の 1 つとして人々の感動体験に着目し、認知というよりも感情に重きをおいた新しい動機づけ研究のフレームを提示しようとする。自伝的記憶としての感動体験はおそらく人間行動の広範な場面での動機づけに関与するものと思われる。例えばある種の感動体験は同じ人が受験生として試験問題に取り組む場合も山岳部として厳しい山に挑む場合も想起され、勇気づけるようなものであると考えられる。人々はそれぞれにこれまでに辿った人生航路で遭遇した多種多様な感動体験を自伝的記憶として貯蔵している。そして、何らかの達成事態に直面し、努力を傾注せねばならないような場合、過去の感動体験が思い出され、自分をさらに強く奮い立たせることになったり、逆境に面した場合に自然に過去に自分が自信をえた感動体験などが思い出され、動機づけられ、再出発を誓うことになる。すなわち、自伝的記憶が動機づけ機能をもつと考えることができる。著名人がインタビューに答えた新聞記事などでは彼らのある時点でのある種の感動体験が卓越した仕事を達成する原動力となったと解釈されるようなものも多い。しかし、このようなことはごく普通の人でも頻繁に見られることではなからうか。

このような自伝的記憶を動機づけの規定因として考える研究のフレームは筆者の知る限り初めて提示されるものである。しかし、われわれは感動的な自伝的記憶が想起され、動機づけとして働くまでのメカニズムについて現在のところ明確な仮説をもっているわけではない。ここでは感動体験の記憶を思い起こすことが動機づけとして機能することを前提としてそのような感動体験の内容を検討することを主たる目的とする。コーエン (1991) は自伝的記憶の中には宣言的なものと経験的なものがあるとしているが、いうまでもなくここでは宣言的なものは含まれない。しかし、経験的なものの中にも特定の出来事の記憶もあれば同じようなことが何度も繰り返され普遍化した総括的なものも含まれていよう。また、もともとの出来事をそのまま複写した記憶もあれば、再構成した記憶もあろう。

研究 I

目的

青年たちが自らを動機づけるようななどのような感動体験を記憶しているのかを検討する。ここでは特に周囲の人たちから聞いた話や言葉に限定して感動体験を収集する。周囲の人たちとは家族、先生および友人であり、その他に、人ではないがマスコミも想定する。それぞれの感動体験にはどのような内容が含まれるのか、また、感動体験はどこから得ることが多いのか、そもそも「無感動」といわれる現代青年が感動した記憶をもっているのかについても明らかにしようとする。

方法

有効調査人員：大学生 157 名 (男子 91 名, 女子 66 名), 高校生 774 名 (2 年生男子 203 名, 2 年生女子 197 名, 1 年生男子 186 名, 1 年生女子 188 名), 中学 3 年生 78 名 (男子 38 名, 女子 40 名)

調査内容：深く感動した話や言葉について自由に記述させるという方式で調査した。ただし、その話の出所を家族、先生、友人、マスコミ (本・新聞・テレビ)、その

1) 名古屋大学大学院博士課程 (後期課程)

他に分類して尋ねた。「感動した話や言葉についての調査」の中でのやり方の指示は次のとおりである。

「この調査は青少年の生活の原動力となる話や言葉について調べるものです。調査結果は学校での評価とはまったく関係がなく、研究以外の目的で使用することはありませんので正直に教えてください。

あなたは誰かから聞いたり、また本やテレビをとおして見たり、聞いたりした話、あるいは言葉（詩や歌なども含む）に深く感動した経験が何度かあることと思います。そして、その中には今でもあなたの心に印象強く残り、あなたの生活の励みになっているものがあると考えられます。それは①どのような内容の話や言葉なのか、②具体的に誰からあるいは何から、どんな時得たものか、③どんな場面で勇気づけられるのか、の3点に関して例にならって記述して下さい。その言葉や話の出所をⅠ. 家族 Ⅱ. 先生 Ⅲ. 友人 Ⅳ. 本・新聞・テレビ Ⅴ. その他 に分けて書いて下さい。また、全部書かなくてはいけないわけではありませんので、思い出す話や言葉がないところは白紙のままにしておいて下さい。」

このように、ここで記述を求めたのは感動したことで、しかも現在、生活の励みになっており、動機づけ機能を果たしている事柄である。

学校名、学年、性別のみを記入させ、名前は記入させなかった。

結果と考察

1 出所別にみた感動体験

学年別、性別に出所ごとに記述された感動体験の割合を示したものが表1である。ただし、ここで分析の対象としたのは質問①の答えに対してのみである。質問②、③に関するの応答は少なかったためここでは整理しなかった。また、Ⅴその他の内容についても回答が少なかったため省略した。

全体的にみると期待していたほど多くの感動体験が記述されたわけではない。しかし、これは現代青年が一般に無感動ということに直接つながるとはいいがたい。なぜなら最初から多くの自由記述を求めており、そのすべてに答えること自体、被験者にとって多大の労力を要することと考えられるからである。

まず、被験者の違いでみていくと大学生のマスコミ以外では女子の方が多くの感動体験をしている傾向がある。これは男女で経験が異なるというよりも女子の方が感動しやすいためであろう。学年別では概して中学生・高校生よりは大学生で感動体験が多くなっている。中学生の男子が特に低率である。この相違は感動体験そのものの多少だけでなく、発達的な自由記述することへの慣れ、あるいは逆に文章を綴ることの困難さも反映した結果であるように思われる。

その点、感動体験の出所別の比較は同じ被験者群であれば他の変動因の混入する余地が少ない。中学生の場合、男子ではマスコミからの感動体験が相対的には多い。女子はマスコミ、家族、先生の順であり、男女とも友人からは少ない。高1では男女ともマスコミ、先生、友人、家族の順になり、友人からの感動体験が相対的に増大するといえる。高2の場合も類似した傾向がみられるが、特に男子の場合の出所においても感動体験の数が増大する。大学生では男女ともマスコミ、先生、家族、友人の順となり、また、家族の位置は友人と逆転することになるが、その差はあまり大きなものではない。マスコミからえた感動体験が多いというのはここでいうマスコミというのがテレビ、新聞のみならず、雑誌、漫画、小説、映画、歌など多くの媒体を含んでいることにも関係するのであろう。しかし、最も身近な家族からの感動体験が意外に少ないのは気になることである。日常生活であまりに身近にいることが感動体験を感動体験として意識させないのかもしれない。

表1 出所別にみた記述された感動した話や言葉の割合
(人数以外の数値は%)

学年	性別	人数	家族	先生	友人	マスコミ
大学生	男	91	28.6	37.4	25.3	71.4
	女	66	45.5	51.5	37.8	59.1
高 2	男	203	23.6	38.9	26.1	44.3
	女	197	37.6	35.0	35.0	51.3
高 1	男	186	10.2	19.4	11.2	38.3
	女	188	23.6	38.9	26.1	44.3
中 3	男	38	13.6	7.9	2.6	23.4
	女	40	40.0	37.5	17.5	52.5

2 内容分類別にみた感動体験

記述された感動体験を筆者2人で討論しながら分類することを試みた。表2は各カテゴリーごとの出現の割合が記されている。ここでは1人が2カテゴリー以上のことを述べていた場合、分けてカウントしてあるのですべてのカテゴリーの数値を合計したものが表1の割合と等しくなるわけではない。また、ここでは男女および高1と高2を込みにして計数している。

まず、出所が家族の場合についてみてみよう。第1のカテゴリーは「苦勞努力体験」と命名したもので父、母、祖父母などから語られた苦勞話、努力した話を中心である。たとえば「父が若い頃、朝早く起きて、畑仕事を手伝ってから学校へ行き、優秀な成績をとり、陸上部に入ってマラソンなどで上位ばかりとっていた(中学生)」「父は子どもの頃、自分の父親が戦争で死に、今の親の所へもらわれてきた。中学を卒業して高校へ進学したかったが、行かせてもらえず、自分で働きながら夜間の高校に通い卒業した(高校生)」「母親が高校進学する時、祖父が大病にかかり、祖母が病院につきっきりだったため、母は進学を断念し、家事全般を引き受けたそうだ。でも結婚してからも勉強をしたかったので弟が小学

校へ入学する時に、母は通信制の高校へ入学して、夜勉強し、日曜も学校へ行って単位をとり、きっちり4年間で卒業した(大学生)」などである。家族の中の誰の体験かという点に関しては高校生の場合も大学生の場合も父親の体験が相対的に多かった。

第2のカテゴリーは「愛情」であり、家族が自分に愛情を注いでくれたことや家族が他人に注いだ愛情に感動し、それを思い出すと励まされるものである。「祖父が電気屋を営業していた時、盲目のおばあさんを元気づけたいからという目的でラジオを購入したがっていったお客さんのお金がラジオ代の半分に満たなくても、そのような理由なら半額以下で売ってしまったこと(高校生)」「みんなお姉ちゃんの帰りを待っているよという妹からの手紙(大学生)」「生まれた時、肺炎になり死にそうだった時、両親が一生懸命一晩中、祈り続けてくれたこと(高校生)」など。

第3のカテゴリーは「生き方」であり、家族から言われた生き方を示唆する言葉である。たとえば、「神様がいつもみているのだから正直に生きなさい(中学生)」「おまえが選手になれた時には影で必ず泣いている人がいた。だから、今度選手になれたら支えてくれた人たち

表2 カテゴリー別出現件数と出現比率(%)

出所別	カテゴリー	中学生	高校生	大学生
家 族	I. 苦勞努力体験	7 (8.97)	63 (8.14)	18 (11.46)
	II. 愛 情	3 (3.85)	23 (2.97)	14 (8.92)
	III. 生 き 方	9 (11.54)	47 (6.07)	14 (8.92)
	IV. 励 ま し	15 (19.23)	40 (5.17)	13 (8.28)
	V. 慰 め		5 (0.65)	
先 生	I. 苦勞努力体験	2 (2.56)	22 (2.84)	4 (2.54)
	II. 愛 情	2 (2.56)	19 (2.45)	1 (0.63)
	III. 生 き 方	8 (10.26)	72 (9.30)	26 (16.56)
	IV. 励 ま し	13 (16.67)	134 (17.31)	37 (13.57)
	V. 慰 め	3 (3.85)	1 (0.03)	
	VI. 第3者体験		14 (1.81)	2 (1.27)
友 人	I. 苦勞努力体験	3 (3.85)	14 (1.81)	8 (5.33)
	II. 友 情		47 (6.07)	12 (7.64)
	III. 生 き 方		15 (1.94)	8 (5.09)
	IV. 励 ま し	14 (17.95)	79 (10.21)	16 (10.19)
	V. 慰 め	3 (3.85)	18 (2.33)	
	VI. 第3者体験			1 (0.64)
マスコミ	I. 苦勞努力体験	8 (10.26)	83 (10.72)	6 (3.82)
	II. 人 間 愛	6 (7.69)	42 (5.43)	15 (9.55)
	III. 生 き 方		95 (12.27)	15 (9.55)
	IV. 励 ま し	35 (44.87)	131 (16.93)	64 (40.76)
	V. 慰 め	4 (5.13)	55 (7.11)	19 (12.10)

の思いも忘れるな（高校生）」「ほめる人には気をつけなさい。しかる人ほど大事に思っていてくれる（大学生）」などである。生き方が動機づけの方向性を与えてくれるという意味で意義があろう。

第4はどの被験者層でも頻度が最も高い「励まし」である。「何を言われてもくじけるな（中学生）」「頭がいいとか悪いとか言うてはいけない。人間の頭なんて、そんなにかわらない。やるかやらないかの違いだけだ（高校生）」「『勉強しなさい』と一度も言ったりしない両親によく成績表をみせて、父が『よくやってる』と言うので、『こんな成績表をみてそんなことをいう親はないよ』と言ったら『それだけ信頼していることじゃ、人と比べてではなく、自分が納得できるのが大切だ』っていわれた（大学生）」など。

第5は高校生にのみ設定されたカテゴリーであるが「慰め」とした。例をあげると「あんたはお母さんとお父さんの子なんだからいくら頑張ってもできないことはあるよ。自分なりに頑張ったと思えばいいんだよ」「何とかなるさ」などである。

次に出所が先生の場合であるが、第1は先の家族の場合と対応させて「苦勞努力体験」とした。先生自身が苦勞したり努力した話を聞いて感動したのである。「学生時代、家が貧乏だったため、夜遅くまでアルバイトして自分で大学を卒業した（高校生）」「先生は娘に『生徒に髪を眉上に切れと言うなら、自分もきちんとしなきゃ』といわれて、前髪を切ってきました（大学生）」「大学卒業の頃に失明して自殺まで考えた（大学生）」など。

第2は先生の「愛情」であり、「卒業式に先生が泣きながら歌ってくれたこと（高校生）」「私にとってあなたたちは太陽です。そして、私の誇りです（高校生）」などがある。

第3の「生き方」も家族の場合と対応したカテゴリーであり、「私は教師という仕事に誇りをもっている。学校という場を借りて、子どもたちの成長を見守り、そして手助けしていくことができるということは本当に凄いことだと思う（高校生）」「たとえだまされる人間になったとしても、だます人間だけにはなるな（大学生）」などがみられる。

第4の「励まし」は家族の場合以上に頻度が高いことがわかる。先生から励まされた言葉の例としては「自分の人生では誰もが主人公である（中学生）」「継続は力なり（高校生）」「死ぬ気でやればなんだってできる（高校生）」「原石は磨かないとダイヤモンドにはならない、今しっかり頑張れば、必ずダイヤモンドになる（大学生）」などがある。他のカテゴリー分類に関してもいえることではあるが、特にこの「励まし」と先の「生き方」は便

宜的にどちらかに割り振ったが、どちらに分類することも可能と思われるようなものもあった。例えば「花が咲かない時は、土の中で根を伸ばせばいいじゃないか」などは両方の意味が含まれているように思われる。

第5は「慰め」で中学生のみに認められたもので、例えば「人生あきらめが肝心」などという先生の言葉に感動したと報告された。これは緊張を緩めることでむしろ動機づけの低減につながるように思われるが、緊張を解き、体制を立て直すことで新しい方向への動機づけが形成されることもありうるものと考えられる。

第6は第1に最も近いもので先生が自分自身の経験についてだけでなく他の人の行動や体験について語ったものであり、「第3者体験」と命名したカテゴリーである。これは中学生ではみられなかったが、たとえば「元暴走族の人が20才になって勉強をして、大学に受かり、今は予備校の先生をしている（高校生）」「病気の子が最後の最後まで生きようと努力し、生きていくことに喜びを持っていたという話（高校生）」などである。特に前者の話は被験者となった高校生にとっては極めて印象的な話であったようで同じクラスの6人もの生徒が同じことを記述していた。

友人から得た話の第1はやはり「苦勞努力体験」で、「両親が死んでしまっても、兄弟だけで毎日暮らしているのにいつも元気に学校へ通っている（高校生）」「お母さんが入院しているのに、勉強だけでなく、家事もしっかりやっている（高校生）」「まだ学生なのだが、親があまりしっかりしていないので、バイトをして親に金を送ったりする（大学生）」などがみられた。

第2は家族や先生の場合の「愛情」に対応するもので「友情」としたが、友だちの暖かい気持ちに対して感動したものである。「長い間、病気で学校に来られなかった時、クラスの子がお見舞いにきたこと（高校生）」「辞めなければ、辞めればいい。帰ってきたくなったら、いつでも帰ってこい。待ってるから（大学生）」などがある。

友人の場合、「生き方」に対応するものは少ない。高校生にみられるのは進路に関するものが中心である。「先輩が自分の夢に向かって一生懸命頑張っている姿（高校生）」

「励まし」は数としては最も多い。「下を向いていたら何も見えないから、前を向いて歩いて下さい（高校生）」「苦しいときこそ笑ってようね（高校生）」「自分が間違っていないと思うこと、自分がやりたいと思うことをやればよい（大学生）」などが含まれている。ただし、第2の友情にいれてもよいと思われるものも少なくない。

「慰め」は中学生と高校生にみられる。「時間が解決

してくれる(中学生)」「昔に嫌な時があっても、今となつては過去のことで、過ぎ去ったことは深く追求せず、悔やまず、今を精一杯生きる。今がよければそれでいい(高校生)」

最後に出所がマスコミ等によるものであるが、どの被験者層においても最も多くの記述がみられる。第1はここでも同じく「苦勞努力体験」と命名したものであるが、内容的には他者の努力に対して感動する場合、他者の不運や不幸な姿から対比的に自分の幸せを感じ、自分を奮い立たせる場合、両者が含まれる場合などがある。「あるスポーツ選手がけがを克服して優勝したこと(高校生)」「ヘレン・ケラーの伝記(中学生)」「片腕の投手が一線級の先発投手としてがんばっていること(高校生)」「ある病気の女の子が、自分が数年後死んでしまうと分かっている、必死で生きようと努力している様子(高校生)」「半身不随になった人が、それにくじけず、口で絵を描き始め、しっかり生きていく話(大学生)」など。

第2は「愛情」や「友情」に対応するもので「人間愛」とした。ある人物の話として「消防団の団員が危機が迫った時、自分だけ助かろうとせず、仲間を助けに行っていたが、結局二人とも死んでしまった(高校生)」「ユダヤ人にビザを発行し続けた大使館の人の話や戦後韓国で孤児達を育て続けた人の話(高校生)」などがあり、他に、格言的なものとして「One for all, all for one.(大学生)」「自分が生きているのは、自分の知っている人の幸せのため、その人が喜ぶのを見るためだ(大学生)」などがあつた。

「生き方」は本などから得たものが多い。しかし、歌の文句などもあげられている。「他人がどれだけ自分の心に住んでいて、他人の痛みを自分にどれだけ同じように感じられるかで優しさが決まる(高校生)」「人を疑うことよりも、人を信じて傷つく方がよい(高校生)」「理想というのは、殆ど実現しないけれど、それを目指して生きているんだ。理想がなかったら絶望だ。だから理想を捨ててはいけない(大学生)」など。

「励まし」は最も多く、情報源は映画、小説、聖書、マンガ、歌、コマーシャルなど幅広い。「求めなさい、そうすれば与えられます。探しなさい、そうすれば見つけられます。たたきなさい、そうすれば開きます(中学生)」「負けないこと、投げ出さないこと、逃げ出さないこと、信じること、だめになりそうな時、それが一番大事(高校生)」「天才は1%のヒラメキと99%の努力である(大学生)」などが含まれている。特に高校生、大学生では歌詞が励ましになっている場合が多い。

「慰め」は「明日は明日の風が吹く(高校生)」「その

うちなんとかなるだろう(高校生)」「なるようにしかならない(大学生)」などから構成されているカテゴリである。ただし、このカテゴリの中にも、例えば「やり直しのきかない人生なんかない」というように先の励ましと弁別が困難なものもかなり含まれている。

さて、出所別にみると内容カテゴリの出現頻度になんらかの特徴がみられるだろうか。まず、「苦勞努力体験」は家族、マスコミに比べて先生、友人では相対的に少ない。友人の場合は年齢的にみても経験が乏しく、語る材料に事欠くことが予想されるが、先生の口から子どもを感動させるような自らの体験が語られていないことは意外であつた。

第2のカテゴリは愛、親和に関連するもので出所ごとに内容的に異なるので相互に比較することは妥当ではない。ただ、青年期には友人関係が重視され、友情を感じることが行動のエネルギーとして機能する場合がかなりあることが窺われる。

「生き方」に関しては先生やマスコミで相対的に高い。しかし、友人の場合は相対的に低い。これも友人は人生経験において差がなく、一方が生き方を示唆するというようなことが困難なためであろう。

どの出所においても最も出現頻度が高いのが「励まし」である。マスコミでは特に高いが先に述べたように歌などが多く含まれている。しかし、苦勞努力体験や愛情、友情、人間愛といったものと生き方や励ましの自伝的記憶の性質はやや異なるもののように思われる。前者は特定の出来事に基づいたものであるのに対して、後者は短い言葉が様々な事態で何度も繰り返されて成立した総括的なものである。

感動体験が「慰め」というのはやや奇妙に感じられるが、それが自分をリラックスさせるものであることにより行動のエネルギーとなりうると考えられる。出現頻度は一般に少ないが相対的にはマスコミで多い。

第3者体験としたものも出現頻度は極めて少ない。ただし、高校生では先生からそれを得ている者が少しいる。先生は自分自身の体験について語るのではなく、他の人の話で代用させているのかもしれない。

研究Ⅱ

目的

先の研究は感動した誰かから聞いた話や言葉を分類整理したものであつた。しかし、感動体験というのは情報源が他者ばかりとは限らない。むしろ、自分自身の行動体験が感動を呼び起こし、長く記憶されており、それが動機づけの役割を果たす場合も多い。さらに、先の研究では出所別に感動体験をいくつも記述することを要求し

たために、文章化する意欲を低減させ、結果としてかなりの被験者が白紙のまま返したように思われる。そこで、研究Ⅱではその2点を克服するかたちでの感動体験の調査を実施した。他者から聞いたり、見たりした感動体験以上に自分自身の行動が源となった感動体験は自伝的記憶としてもより鮮明で行動の原動力になる条件を備えていると考えられる。

方 法

有効調査人員：大学生男子67名 大学生女子60名 成人(看護婦および看護学校教員)48名、なお最後の被験者群の年齢は27歳から45歳まで幅がある。

調査内容：調査での教示文は以下のようである。「人はさまざまな思い出をもって生きています。なかでも個人的に感動した体験はよく記憶されていて、それを思い出すことが活動の原動力になり、生活の励みになる場合が少なくありません。私たちは皆さんのそのような体験について研究しています。感動体験の中には自分自身の行動上の体験(たとえば、マラソンを完走した)、他の人から聞いたこと(たとえば、父母の苦労話)、見たこと(たとえば、テレビでみたアフリカの飢餓の子どもたち)などが含まれていることと思います。皆さんがやる気をなくした時、あるいはがんばらねばならない時によく思い出し、それを思い出すと活力がわいてくる感動体験をできるだけ詳しく記述して下さい。できれば印象的な感動体験を2つ書いてほしいのですが1つでもかまいません。記述の内容は①どんな内容の感動体験か(誰が、誰に、何を、どこで、どうしたのか)、②それはいつ頃の体験か、の順でお願いします。」

所属、性別、年齢だけを記入させ、無記名で回答を求めた。

結果と考察

1. 全体的傾向

被験者は感動体験を最大2ケース書くことが可能であった。同じ人によって書かれた2ケースも独立したものと考えて整理したところ、大学生男子108件、大学生女子93件、成人女子65件の感動体験が収集されていた。あま

りに多くの質問項目をたて記述を求めなかったことで、1件につき記述された量は先の研究の場合よりもはるかに多かった。そこで、まず内容を、自分自身の行動体験、感動体験の出所が家族、先生、友人、マスコミの場合に大別して出現比率(%)をみた(表3)。この結果からわれわれが予想したように最も頻繁に記述されているのは自分自身の行動体験であることが明白である。特に大学生男子ではその傾向が顕著である。先の研究で出現頻度の高かったマスコミもやはり相対的には高いといえるが、家族に関しては大学生において占める割合は低い。しかし、成人女子の場合は相対的に高いことが示されている。これは成人女性の多くが大学生と違って既婚者であったことと関係するのかもしれない。また、先生からえた感動体験は大学生の場合も成人の場合も極めて少ないといえる。研究Ⅰでは大学生の場合、先生からえられた感動体験は友人からえられたそれよりは多かったが、このような出所を限定しないかたちでの調査で数が少ないということは先生からの感動体験の自伝的記憶は相対的に印象の薄いものかもしれない。

2. 感動内容について

先の研究で全く拾い上げることができなかった本人自身の行動体験の内容をみてもまず第1は成功体験ないし承認体験としてまとめることができるように思われる。ここで記述された内容をすべて表現する紙面のゆとりはないので要約的に述べると、「ソフトボール大会で優勝したこと」、「大学に合格したこと」、「吹奏楽部での県大会出場」、「クラブの部長から役割を認められた」(以上大学生)、「産婦として一人で分娩介助ができるようになったこと」、「患者から亡くなる前に『君はいつも安定していて接していると気持ちが乱されることなく落ちついてくる』といわれたこと」(以上成人)などをあげることができる。

第2は苦しい体験、または苦しさを乗り越えた体験であり、「32キロ競歩での完走」、「クラブでの450回の腕立てふせ」、「さか上がりを夏休み中、練習してできるようになったこと」、「クラブでサッカーの試合に負けてダッシュ100本したこと」(以上大学生)、「出産の苦しみ」、

表3 出所別の出現比率(%)

被験者	本人の行動	家族	先生	友人	マスコミ
大学生男子	63.9	6.5	3.7	2.8	19.4
大学生女子	40.1	9.7	6.5	11.8	20.4
成人	40.0	24.6	3.1	1.5	16.9

(注) 全体で100%にならないのは出所の分類が不明なものがあるためである。

「夜間登山」(以上成人)などをあげることができる。しかし、実際は苦労して成功という場合が多いので第1と第2の分類はどちらにいてもよいと考えられるものも多い。

次に、第3は協同の喜びとでもいえるものであり、「アメリカンセミナーへの参加しての連帯感の形成」、「学園祭でみんなであんみつやぜんざいの仕込を夜遅くまでして優秀賞をとる」、「文化祭で夜遅くまで残り皆で作品を完成させた」、「体育祭の後のファイヤーストーム」(以上大学生)、「上司、同僚と仕事の問題など一晩中語り合った」、「つらかった看護学生時代の仲間の協力」(以上成人)などである。

出所が家族の場合については研究Iと類似した内容が示されたが特に成人の場合については「働いていて十分子どもの面倒をみてやれないのに子どもから『お母さんいつもありがとう、これからもがんばって』といわれた」というような子どもから投げかけられた言葉が感動体験となっているケースがみられた。その他の出所が先生、友人、マスコミの感動体験の内容は研究Iの場合と類似しているように思われた。

3 感動体験の時期

記述された感動体験が1つの自伝的記憶となっていると考え、その時期について尋ねたものを整理してみた。何歳の時というような記述もみられたが小学校時代あるいはそれ以前(中学以前)、中学時代、高校時代、高校以降にわけて全体に占める割合を示したものが表4である。その時期が明記されていないデータもあるので合計は100%になっていない。ここで興味深いのは大学生と成人の相違である。大学生では男女とも現在と時間的に近いところの感動体験が相対的に多く思い出されている。すなわち、中学以前のものが最も少なく、高校時代のものが多くなっている。それに比べて成人では高校以降のことが最も多いことになる。それは高校以降の年月が大学生に比べて全く異なるため当然のことといえよう。注目されるのは古い記憶である中学以前の感動体験が成人の場合、中学や高校時代のそれより多いことである。人生のどこの地点から過去を振り返るかによって印

象的な思い出のある時点が異なるのは興味深い。

討 論

1. 動機づけ機能としての感動体験

現時点での動機づけは過去と将来によって規定されている。単純化していえば、過去とは本人の経験であり、将来とは目標である。後者の目標は将来何に成りたいかといったことから次の課題で、どの程度の成績をあげることを狙うかといったことまで含まれる。一方、過去の経験とは本人の成功・失敗経験、収集された情報などが考えられる。たとえば達成動機研究ではTATを用いて個人の達成動機を査定するが、それは本人自身の達成経験が無意識化され、抽象化されたものを引き出す試みとみることができる。

ところで、人を動機づけている過去経験の中にはもっと具体的、意識的なものがあり、その内容を直接検討することが必要ではなからうか。これが本研究に着手したわれわれの動機である。筆者らの考えでは過去の具体的な体験についての記憶が現在の行動を動機づけることも十分ありうるように思われる。

これはきわめて常識的な発想に思われるがこのような角度からの動機づけのアプローチはこれまで内外でまったくなされていない。この研究のフレームにはわれわれの人間観のようなものが反映しているのかもしれない。長年、原因帰属研究で係わってきたWeiner(1992)は人を神のような理性的な存在としてとらえ、認知論的動機づけ理論を展開しているが、筆者は一般の人々を神や科学者のような聡明なものとは考えていない。考える存在というよりはむしろ感じる存在だと思っている。人は現状を冷静に論理的に原因分析して行動をおこそうとする場合よりもなんらかの外的刺激を受けて内的関連情報が活性化され、直接的に感情が高まることで行動が引き起こされる場合の方が多いように思われる。

しかし、これを具体的にどのようにして研究していくかは困難な問題である。本研究では自伝的記憶が動機づけ機能を果たしていることを前提としてその自伝的記憶の内容を探ろうとした。しかし、調査の上では自分を励ましたり、生活の原動力となるような感動体験を記述

表4 感動体験の生じた時期の出現比率(%)

被験者	時期	中学以前	中学時代	高校時代	高校以降
大学生男子		9.3	20.4	34.3	10.2
大学生女子		8.6	22.6	33.8	23.7
成人		18.5	4.6	6.2	44.6

(注) 全体で100%にならないのは時期が不明なデータがあるためである。

するように求めたので、一応、動機づけ機能を果たしている感動体験が収集されたとみなしてよいであろう。研究Ⅰでは自由記述であるにも拘らず、あまりに多くの質問をしたために無回答の部分も少なくなかったが、結果で示したように多様な内容が収集された。また研究Ⅱではここでは紙面の都合で詳しく紹介できなかったがかなり詳細な記述がみられた。それゆえ、感動体験が動機づけを引き起こすというわれわれの考えは大方支持できるものと考えられる。もちろん、より厳密には因果関係を問題にしているので巧みな研究によってその真偽が検討されねばならない。

2. 自伝的記憶の内容と動機づけの程度

さて、ここでは感動体験という自伝的記憶の内容別に動機づけとの関わりを考えてみよう。つまり、どのような記憶内容が動機づけとして重要な働きをするのかという問題である。しかし、本研究でこの問題を解くための明確な証拠となるようなものは見いだされていない。従って、筆者らの推測に基づくことになるが、ここでその問題についての仮説を提案しておくことは次の研究に役立つものと思われる。

研究Ⅰでは自分自身の行動についての記憶に関して問うことがなかったので研究Ⅱでそれを加えたが、研究Ⅱの内容分析からも察せられるとおり、動機づけとして機能する最も中心的なものは自分自身の行動に関する自伝的記憶であろう。内容的には成功体験が前面にでたものと苦しさや前面にでたものがあるが、これは努力を傾注して一定の結果に到達したことでえた自信の背後にある記憶であろう。明らかに達成動機が強化された事態である。この種の記憶はそれ自体特殊化されているので特殊な達成の動機づけを喚起することになる可能性が高い。しかし、動機づけへの影響力は一番大きいと考えられる。

次に重要なものは周囲の人（家族、先生、友人）の苦労努力体験についての記憶であるように思われる。直接接している人の体験は自分に近いものとして受けとめられやすいと考えられる。これと類似しているが、直接接したことの無い人物に関する苦労や努力体験の記憶もある。それはテレビのドキュメンタリー番組でみた現実の人物であることもあるし、本などで読んだ架空の人物の場合もある。しかし、テレビや本でえた苦労努力体験はやはり関連情報に乏しく、周囲の人からえたものよりは動機づけ機能は一般に弱いように思われる。

さらに周辺的なものとしては生き方についての言葉や励ましの言葉であろう。これらは調査の中では出所ごとに区別して整理したが、これらはどれも1つのストーリー

として記憶されているというよりも自分の人生となんらかの関わりをもって、短い言葉として記憶されているという意味で共通しており、広い意味での自伝的記憶と考えられよう。この中には青年の場合は特に歌の歌詞なども含まれているのが特徴的であった。それが自伝的記憶といえるかという疑問もあるが、その歌詞が本人の生活にとってなんらかの意味を付与したものになっていれば自伝的記憶といえると考えた。しかし、これらは特定の大きな達成行動を動機づけるというよりは些細な日常行動を動機づける働きが強いかもしれない。筆者にも青年の頃、ちょっとした達成事態に「若いという字は苦しいという字に似てるわ」といった歌詞が自然に浮かんで来て口ずさみ、自分を励ましていたような記憶がある。

また、本調査では感動体験として親や先生の愛情、友だちの愛情を意味するものもみられた。達成の動機づけに関してもこれらは無関係ではない。人に暖かく支えられているという気持ちが、さまざまな場面での動機づけにつながるという。これは Deci & Ryan (1991) の relatedness という概念に関係していよう。この種の感動体験は直接的な動機づけになるというよりも間接的なもののように思われる。つまり、この感動体験だけでは動機づけ機能としては弱いのが先にあげたような感動体験が同時に思い起こされる場合、強い動機づけになるように思われる。

ここで述べたのはあくまで仮説であり、自伝的記憶の内容の相違が実際に動機づけ機能としてどれほど異なる役目をはたしうるのかということは今後検討していかななくてはならない。最も容易な方法は典型的な自伝的記憶を項目としてあげ、それを想起した場合の動機づけの高さを評定させることであり、その種の調査結果から仮説が支持されるものか否かのおおまかな見当はつくものと思われる。

また、それぞれの自伝的記憶と動機づけを媒介する感情についても注目してみる必要がある。感動体験としての自伝的記憶の中に含まれるどのような感情がどれほど喚起され、現実の行動に影響するのだろうか。とりわけ、ここで指摘されたような悲しいことやつらいことなどの負の感情がどのようにして行動の原動力となるような積極的な感情を引き起こしていくのかは興味深い問題である。感動体験に伴う感情の質や量が前述したような動機づけ機能と密接に関わっていると考えられる。

3. 動機づけとしての自伝的記憶の集団差

今回の調査では大部分が大学生であったが一部、働いている成人女子のデータもえた。成人女子で目立った内容としては出産の経験や子どもの発言などがあげられた

ことであった。特に女性にとって出産は人生の大仕事の1つでもあり、納得のいくところである。そして、彼女らの感動体験の内容から夫や親だけでなく、自分の体内から生まれた子どもの存在に励まされ、動機づけられることが推測された。また、彼女らが看護婦経験者であったことから患者とのやりとりのなかで形成された自伝的記憶も重要な意味をもっていることが示唆された。

このような事実は被験者の性、年齢、職業等の相違により動機づけの役目を果たす特色ある自伝的記憶が存在することを予想させる。中、高、大学生といった同じような立場にある人の自伝的記憶は比較的類似しているが、職業をもち、子どもをもっている大人ではずいぶん異なるであろう。たとえば教師というような集団では生徒とのやりとりの中で感動し、仕事に動機づけられる場合も多いであろう。様々な職業集団、役割の異なる集団で感動体験の内容を比較してみることは今後の研究として興味深い。

また、本研究で成人は中高校時代のことよりもっと小さい頃のことを大学生に比べて相対的に多く記述する傾向がみられたのは注目される。他の集団でも実施して一般化を検討せねばならないが、確かに大人になっても残っている心の奥底の記憶というのは幼児や児童期のものが多いのかもしれない。しかし、青年たちがあまり小さい頃のことを思い出していないのはどうしてだろうか。青年たちは現在の自分に直接関連することだけに注意が向いていたり、あまり人生を回顧するというような機会がないためではなかろうか。そのような場合、出来事をそのまま複写したかたちでの自伝的記憶が多く、比

較的現在に近いものが思い出され易い。しかし、大人になり、自分の人生をやや冷静に見つめ直すことが多くなると、過去の経験が再構成され、体制化されるようになり、子ども時代の体験の重要性が増すのではなかろうか。これも今後、検討してみる価値のある問題と考えられる。

引用文献

- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, N. J.: Van Nostrand.
- G. コーエン著 川口 潤・浮田 潤・井上 毅・清水 寛之・山 祐嗣訳 1991 日常記憶の心理学 サイエンス社
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1991 A motivational approach to self: Integration in personality. In R. Dienstbier (Ed.) *Nebraska symposium on motivation: Vol. 38. Perspectives on motivation* (pp. 237-288). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Weiner, B. 1980 *Human motivation*. New York: Holt, Rinehart, Winston.
- Weiner, B. 1992 *Human motivation: Metaphors, theories, and research*. Newbury Park, CA Sage.

(1993年8月25日 受稿)

ABSTRACT

Autobiographical Memories as a Motivational Function:
Based on Analyses of Impressive Experiences

Toshihiko HAYAMIZU and Hueichen CHEN

A new frame of motivational study that autobiographical memory would function as motivation was proposed. As the first step of our new research, we aimed at collecting autobiographical memories such as impressive talks and experiences and classifying them into some categories.

In Study I, subjects were asked to describe freely their impressive talks and words given by their families, teachers, friends and mass media. The subjects were 78 junior high school students, 774 senior high school students and 157 university students. As a result, it was shown that mass media as indirect information source brought more impressive talks and words to the subjects rather than did significant persons as direct information sources, i.e. fathers, mothers and teachers. Also, female students recalled more impressive talks and words than did male students. The themata of these talks and words were classified into several categories in each information source, which were named as hardships or endeavor, affection or friendship, way of living, encouragement and so on.

In Study II, university students and adults (nurses) as the subjects were requested to describe two impressive experiences, including their own behaviors that had never been collected in Study I. In the case of the limited numbers of impressive memories, both groups of subjects recalled and wrote their own behaviors more frequently than significant persons' talks and words. However, it was suggested that the contents and the time of impressive experiences were different between university students and adults. It seemed that the subjects' occupation and their life span caused the differences.

From these studies, it was concluded that impressive autobiographical memories have a possibility as a motivational function although what mechanism or process from impressive autobiographical memories to motivation works and to what extent the strength of motivation is determined by the kinds of autobiographical memories should be examined in the future.